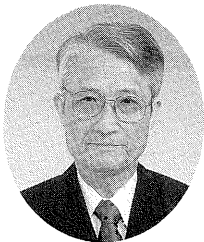


巻頭言



新技術のリスクにおびえベネフィットを失ってよいのか

(財)日本植物調節剤研究協会 理事
東京農業大学 教授

藤巻 宏

昨今、地球環境や健康への関心の高まりの中で、農業のあり方や食の安全性がよく論議されるようになり、これらの問題が大学の卒業論文や修士論文のテーマにも頻繁に取り上げられるようになった。「環境保全型農業」をはじめとして、「有機農業」、「自然農法」、「持続型農業」、「無農薬栽培」「非組換え農産物・食品」など、環境や健康に配慮した農業のやり方が提起され試みられているが、それらの考え方もやり方もさまざまである。こうした環境に配慮した農業の原点は、レイチェル・カーソンの「沈黙の春」や有吉佐和子の「複合汚染」などの指摘どおり、農業資材の多用による自然の生態系の攪乱や破壊にあるとされ、従来からの農薬や肥料に依存し過ぎる農業のやり方が批判され危惧されるようになったところにあると考えられる。

そもそも農業を営むには、多かれ少なかれ自然生態系の破壊は避けられないが、長期にわたり高生産性農業を営むには、持続的に再生産のできる耕地生態系を確立することが望ましい。その意味では、二千年来、毎年イネを連作しても、耕土の流亡や収量の低下を招かない水田稲作農業では、「水田生態系」とでも言うべき固有の持続性の高い生物と環境のバランスができあがっているとみることができる。

ところで、過度の農薬や肥料の多用による自然生態系の攪乱・破壊や環境汚染は、極力避けねばならない。しかし、節度ある資材の投入は、高生産性農業を持続的に営むには不可欠である。その一方で、自然は安全で人工は危険という科学的根拠に乏しい信念に基づく自然農法などに

は、思わぬ落とし穴があることを忘れてはならない。

古今東西、すぐれた新技術には、計り知れないベネフィットがある一方で、克服しきれないリスクが伴いがちである。たとえば、自動車、電車、飛行機などの高速交通機関は、現代人にはもはや欠かすことのできない大きなベネフィットをもたらしている。その一方で、不幸な交通事故のリスクを完全に排除することはできていない。

現代社会に大きな波紋を起こしているバイオテクノロジーやGM（組換え）農作物・食品には、大きなベネフィットが期待できる。それにもかかわらず、科学的根拠に乏しいリスクにおびえ、新技術やその産物を拒絶する傾向があるのは、誠に遺憾と言わざるをえない。

二十一世紀の地球規模問題とされる食料不足、環境劣化、化石エネルギー資源枯渇などの解決には、地球生態系のあらゆる生物種を遺伝資源として活用できるバイオテクノロジーが掛け替えのないベネフィットをもたらすことは、疑う余地がない。科学的根拠に乏しいリスクに対する恐怖から大きなベネフィットを失ってよいはずがない。人の英知と科学技術によりリスクを最小にし、新技術のベネフィットを最大限享受することが現代に生きる私たちの勤めではないだろうか。また、そうすることが私たちの子孫の幸せにも通ずるのではないだろうか。逆に、根拠の少ないリスクにおびえ新技術を拒み続けると、その付けは、子々孫々にまで回されることになるだろうか。